



2020
No
119

contents

特集展示	明智光秀と戦国時代の大津
ミニ企画展	明智光秀と在地土豪 P1～P3 明智光秀と坂本城
学芸員のノートから	「はやり病」への心得を P4～P5 説いた膳所藩主
収蔵品紹介	令和2年に新しく重要文化財に指定 P6 絹本着色天台三祖師像 金台院蔵



大津市歴史博物館

令和2年7月15日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

特集展示 明智光秀と戦国時代の大津

会期 令和2年1月7日(火) 令和3年2月21日(日)

ミニ企画展 明智光秀と在地土豪

会期 令和2年7月7日(火) 10月11日(日)

ミニ企画展 明智光秀と坂本城

会期 令和2年10月13日(火) 令和3年1月11日(月・祝)



特集展示「明智光秀と戦国時代の大津」展示風景

大津から明智光秀の事跡を追う

2020年大河ドラマ「麒麟がくる」は、折り返しとなった桶狭間の合戦シーンで盛り上がったものの、新型コロナウイルスのため撮影やロケが進まずしばらく休止とのこと。次の放送が待ち遠しい一方、そろそろ明智光秀と大津との関わりがどのように描かれるのか気になってきました。観るまうも気合いが入ります。

さて、当館では、今年の大河ドラマ放送が始まった1月から、常設展示室 階の半分を特集展示「明智光秀と戦国時代の大津」としてリニューアルしています。2021年2月21日までの展示の予定です。また、光秀ゆかりの大津市内の史跡などを紹介する約6分の映像も新たに制作し、展示室内の大スクリーンで放映しています。

さらに、この8月には、明智光秀の事跡を紹介する解説パンフレットを発行します。やや伝説的な逸話も含めながら、光秀と大津の関わりを紹介します。

そして、特集展示に加えて、光秀と大津に関わるテーマをとりあげたミニ企画展を7月から約半年かけて2期に分けて開催します。前半は「明智光秀と在地土豪」、後半は「明智光秀と坂本城」です。

在地土豪との関係で読み解く明智光秀の志賀郡支配



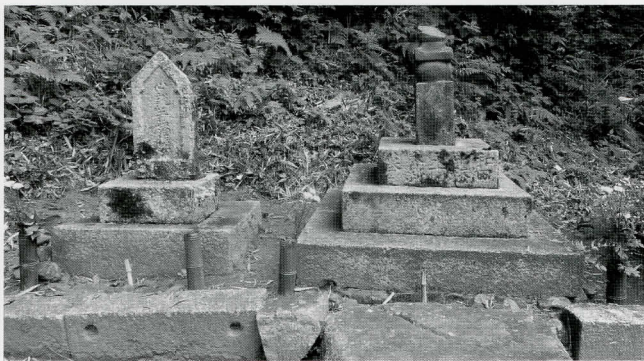
明智光秀書状【元龜2年(1571)】9月2日付 個人蔵

さて、明智光秀をテーマに展示をすると考えた時「どんな(展示)資料があるのか」が問題となります。これほど著名な人物ですから、何かしら資料は残っているだろうと思われるかもしれませんが、ところが、明智光秀は近江に登場してから、宇佐山城主となり、志賀の陣を経て、次は坂本城主となって志賀郡支配を進めていきますが、関係する資料はとても断片的です。あまり残されていないというのが正直な感想です。

その中でも、比叡山焼き討ちの10日前に雄琴の土豪である和田秀純に宛てられた光秀書状は、数少ない非常

貴重な史料です。ここには比叡山周辺で反抗する在地土豪を懐柔し、比叡山焼き討ちの準備を進めていたことが記されています。この光秀書状は、1970年代の『新修大津市史』編纂中に発見され、当時大きな話題になったそうです（現在、大津市指定文化財）。特に、對抗する仰木の人々を「是非ともなで切りこす」といったセンセーショナルな記述は、光秀自身の言葉なのか、信長の意を受けての表現であったのか、とても気になるところです。

雄琴の和田家へ伝わる文書には、比叡山焼き討ちの直前の様子を示すこの書状以外にも、実は2点の明智光秀書状が含まれています。いずれも、在地土豪の和田氏への伝達などを記したもので、光秀による志賀郡支配の一端を知ることができます。



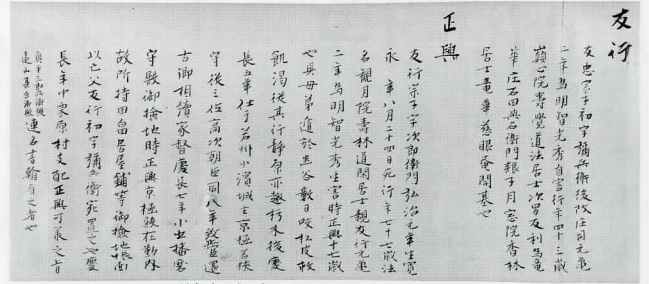
和田秀純の墓（右側）

戦国大名にとっては、在地へ影響力をもつ土豪（在地領主）をいかに抑え込み、味方へ引き入れるかが大きな課題でした。一方で、土豪らは自らの家たすでなく、地域側の代表として、その生存をかけて大名らと対峙したのです。

そして、色々調べていくと、やはりこの湖西においても、和田氏のようにすべての土豪が光秀（信長方）に味方したわけではなかったことが断片的ながら見えてきます。比叡山延暦寺へ味方し、信長方へ對抗した在地土豪や地侍も存在します。例えば、信長方へ帰順する堅田の猪飼氏や居初氏は、当初は對抗姿勢であったと思われますし、もう少し北部の比良山麓地域においては、畑氏（和邇 栗原）馬場氏（小野）伊藤氏（小松）など、浅井・朝倉方に与し、信長への對抗を鮮明に打ち出す人々もいました。

いま一つの手がかりとして、栗原の畑氏に伝わる系図資料をみていくと、後世の記述ですが、畑友行が「元龜二年、明智光秀のため、自害す」などの記述がみられ、光秀へ對抗した様子が読み取れます。その息子正興は、母と弟らと朽木方面に逃げ、その後一時、京極高次の家臣となるも、最終的には地元栗原へ帰ってきたとの記述も

確認できます。信長の近江侵攻、そして明智光秀による志賀郡支配の開始は、在地を掌握する土豪らにとって様々な選択を迫られる出来事であったといえます。



畑氏家譜 江戸時代 個人蔵

明智光秀といえど、本能寺の変や山崎の合戦などに注目が集まりますが、湖西地域の支配という点でその歴史をみていくと、これまでの人物像やドラマとは少し違ったイメージを持っていたたするかもしれません。

大津の地に築かれた城

古代にわづかな期間ながら都が置かれたこともある近江・大津は、戦略拠点として重要な地であったといえます。戦国時代以降には、その時々で政権を掌握していた武将たちによって、坂本城、大津城、膳所城が築かれました。

坂本城は、元龜2年（1571）の延暦寺焼き討ち後に、信長の命令を受けて光秀が築いた城です。その後、羽柴（豊臣）秀吉によって再建されますが、秀吉は坂本城を廃して大津城を築きます。さらに、関ヶ原合戦後は、徳川家康が大津城を廃して膳所城を築いています。時代ごとに政権を握ったものによって、その拠点は移り変わっていきました。

坂本城、大津城、膳所城は琵琶湖をとりこんだ水城として築されましたが、残念ながら、現在はいずれも現地でその痕跡を見ることはほとんどできません。特に坂本城は、光秀の城として存在した期間も短く、当時の文献にも、その構造などがわかる資料はほとんど残っていません。

発掘された坂本城

地上に城の姿がほとんど残っていない場合でも、その場所にかつて城が建てられていたのなら、地面の下にはその建物の痕跡や、当時使われていた品々が埋もれている可能性があります。これを見つかる方法が、埋蔵文化財の発掘調査です。現在、大津市下阪本二丁目の東南

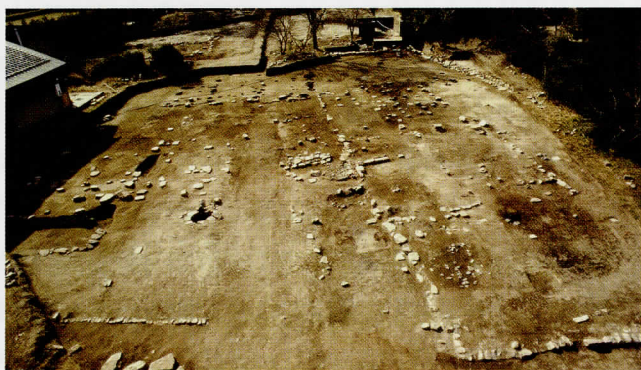
寺周辺が坂本城跡として遺跡の範囲になっています。この坂本城跡と推定される範囲内では、これまでに20回以上の発掘調査が行われていますが、特に昭和54～57年度の本丸推定地の調査では、光秀の時代の坂本城の建物跡が見つかっています。

この時の調査地は、現在、坂本城址公園として光秀の石像が建つ緑地から、200m程北側にあたる湖岸沿いです。

調査の結果、安土桃山時代のもので厚さ10～20cm程の焼土層を境に上層・下層に分かれる2時期の遺構(昔の建造物などの跡)が見つかりました。

この焼土層は何かという話ですが、実は光秀の死後、坂本城は炎上して落城しています。本能寺の変で信長を討った光秀ですが、わずかな期間のうち、山崎の戦いで敗北し、坂本城へ落ちのびる途中に討死します。光秀敗北の知らせを受けた家臣の明智秀満ひでみつは、安土城から坂本城へ移動し(この時の逸話が「左馬之助湖水渡り」として伝説になっている場面)坂本城に入りますが、秀吉軍に囲まれて城に火を放ち、光秀の一族もろとも亡くなったといわれています。その後、秀吉によって坂本城は再建されました。

つまり、この焼土層を坂本城落城の時の痕跡とすると、その上層の遺構は秀吉が再建した坂本城、下層は光秀が建てた坂本城ということになります。この光秀の時代の遺構としては、3棟の礎石建物そせき、掘立柱建物ほったてばしら、2条の石組溝、6基の石組井戸、2基の石組土坑などが見つかりました。建物跡は、光秀一族か家臣らが住まう居館の跡の一部と推定されています。



昭和54～57年度発掘調査の際の遺構全景

また、石組井戸の中に投棄されるなどして、多量の瓦も出土しました。瓦は、その色調が赤褐色のものや暗灰色のもの2種類がみられます。また、炎上の際に被災したとみられる焼けひずんだ瓦や、焼土塊なども見つかっています。

この他にも、土器、国産陶器、中国産の陶磁器類、鏡

や銭貨などの金属製品、石臼、碁石など、細々とした道具も見つかっています。



石組井戸内から見つかった龍頭の瓦

わずかに残る坂本城の痕跡

坂本城の痕跡を地上から見るチャンスもあります。琵琶湖の水位に左右されるので簡単には見られませんが、城の石垣の一部とみられる石列が、現在の護岸近くの湖中に沈んでいます。最近では(といっても26年前になりますが)平成6年(1994)の琵琶湖湖水時、まつきと確認されています。



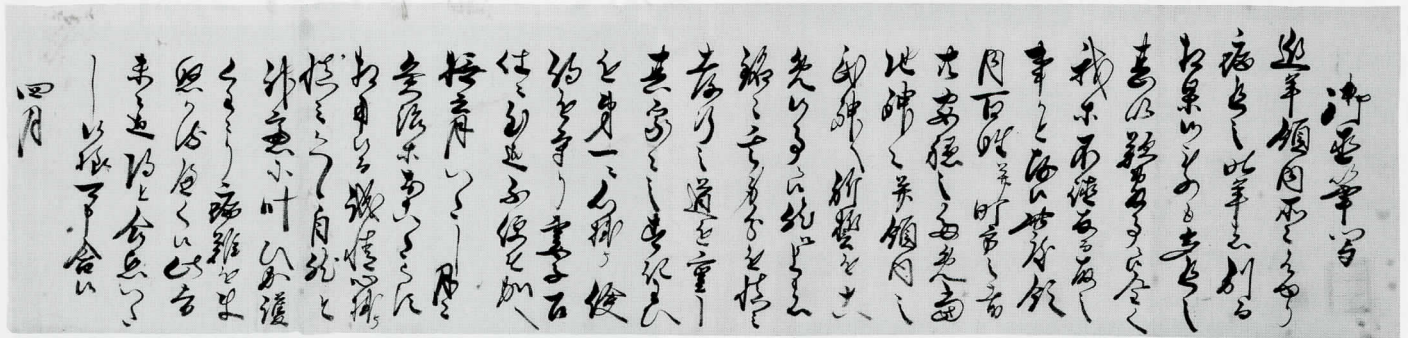
湖中の石垣(平成6年撮影)

特集展示と、二企画展の内容を含む解説パンフレットは、8月中頃に完成予定です。当館ミュージアムショップで販売(24頁、有料)しますので、展示とあわせてぜひご覧ください。



現在の坂本城跡周辺(琵琶湖上空から)

「はやり病」への心得を説いた膳所藩主



〔解説文(返り点付き)〕

御直筆写

近年領内所々よや
病有し之 昨年者別而
相果候ものも多有し之
甚以歎敷事一候、全く
我等不徳なる故之
事カと存候 此度領
内百姓并町方之者
共安穩之ため 当
地神々并領内之
氏神へ祈誓をこ
め候事一候、然ル上者
銘々其身分を慎ミ
孝行之道を重シ
其家々之すきわひ
を第一心掛ケ 儉
約を守リ 妻子召
仕一迄不便を加へ
撫育いたし 月々
灸治等おこたらす
相用候而、誠精心掛ケ
慎ミ候ハ、自然と
神慮等叶ひ加護
くわたり 病難をま
ぬかるべく候、此旨
未々迄得と合点いた
し候様可一申合一候、
四月

新型コロナウイルス感染防止対策として3密を避けるため「れきよく講座」を含むイベントなどが中止となり、毎年恒例の古文書講座(5月開催)も残念ながら中止となりました。今回の自粛 休館期間中、何か古文書講座 かわるものとして発信できないかを考えながら収蔵庫の資料整理を進めていました。

その中で たまたま現在の状況と関わる内容、つまり「流行り病」に関する古文書一通を発見しましたので(写真) この紙上で古文書講座風に紹介したいと思います。ちなみこの古文書は、^{たなかみ}大津市内南部のある田上地域の牧町に伝わるものです。

まず 文書(写真)全体を眺めてみてください。グネグネと字がびっしり書いてあり、思わず目をそむけたくなるかもしれません。しかし、ちょっとまってください。

応、これ日本語なんです。まんの少し 200年程前に書かれたたすです(それでも遠い昔た というツッコミはさておき)。

古文書も 現在の手紙の書き方と大きくは変わりません。タイトルや年月日 差出人や宛先など 色々な部分に注目する必要があります。そこで古文書の最初と最後の部分をみてください。冒頭には「御直筆写」とあって 末尾には「四月」とあります。この「御直筆写」はタイトルのようにも見えますが、古文書全体の状態(性格)を示したメモのような一文です。敬称を示す「御」

が付いてありますので 江戸時代という身分社会にあって 上位者によって書かれた「直筆」を写した文章である という意味となります。誰か偉い人の文章たということが推測できます。

次に本文を見ていきましょう。ちなみに漢字たすではなく 仮名も入り交しっていますのでスラスラと解読するのは少し鍛錬が必要です。例えば 本文1行目 2行目にかけて「はやり病」と書いてあります。この言葉は古文書の内容が凝縮されているような気がしますが、文字に注目すると「は」は「者」の字を崩したものです。これは変体仮名といって 漢字一文字を平仮名として読みます。もう一つ 例えば本文後ろから3行目 4行目にかけての文字をそのまま漢字で読むと「ま怒可流遍く」となります。これでは何かわかりませんが 変体仮名としてよむと「まぬかるへく」(免れるよう)ということになります。

もうここで降参 という方、ちょっとたす待ってください。古文書の解読は、「さあ読むぞ」と辞書を片手、字一字読んでいくと、意外に立ち止まってしまうことが多いのですが、これは江戸時代の文章なので、まずはその時代の言い回しや用語に慣れていく必要があります。そこで、私が担当する古文書講座などでは、まず解読されたものから読んでみる、ということを実践しています。まずはどんなことが書かれているのか、その上で崩した字

まどうなのかと繰り返していくと 自然と解読できるようになっていくと思っています。そこで 写真の下に解説文を付しておきました。まずはこれを一読いたしたき その上で次に意識をしてみますので内容を一緒に確認してみましょう。

近年、領内の様々な場所で流行り病が起っています。昨年は特に亡くなった者も多い状況で とても嘆かわしい事態です。本当に 我々の不徳の致すところであると思っています。この度 領内の百姓と町人の安穩のため 当地の神々や領内氏神への加護を祈っているところです。その上で それぞれが身の上を心掛け 父母への孝行を大切にすること。また家のなりわいを第一に心掛けて儉約を守り 妻や子供 奉公人などに至るまで慈悲の心をもって撫育し 毎月の灸治なども怠ることがないようにしてください。誠心誠意 心掛けて慎重に行動すれば そのうち 神慮の加護によって病気の災難をまぬがれることができるでしょう。このことを皆々がよく注意をして納得するように申し聞かせてください。

解説文と意識を読んでいたたければ なんとなく書いてあることをご理解いたたけるのでよいと思います。ただし いくつか 用語に説明が必要でしょう。「すぎわい」は生業のことで「不便」は「かわいそ 気の毒」ではなく「かわいいと思ふこと。愛憐の情を感じること」です。解読してよくわからない言葉が出てくると 国語辞書で調べてみる必要があります。また どうしても意味が通しないときは 解読した文字が間違っていることがあります。部首や旁を分解して検討し 筆順がどうか 文意は合っているかどうかなど あれこれと推測しながら解読を進めていきます。真剣に眺めていると くと文字が舞い降り（ ることもありますが）徐々に読めるようになります。講座では3ヶ月間続くと解読できるようになると吹聴しています。3ヶ月続くと その後も習慣化してずっと続いていきますので1年経つころにはスラスラと読めるようになります。私も講座でたくさんの人を誘導して古文書ファンとなるよう お話してきました。

さてさて こうしてようやく内容までたどりつきました。この古文書の内容は、現在の新型コロナウイルス対策しか 江戸時代の「まや病」にどう対処するかの通達文、心得を論じたような内容です。もちろん、現在のよような医療が確立していない時代ですので 毎日の生活態度や神仏への祈りが欠かせなかった社会であったと理解し

ておく必要もあります。

ただ これが古文書解読は終わりではありません。その内容から 時代や社会を考えることが古文書を〈読む〉〈学ぶ〉ことです。そこで この古文書をいつ誰が誰に対して出したものなのかを検討して 出された状況を考える必要があります。残念ながら年号はなく「四月」と月日が記されているだけです。あえて微かな手がかりを探してみると 本文にある「相果候者」(亡くなった者)も多かったという一文が唯一の情報となります。まさしくこの文書の前年、流行病が流行していたこととなります。

さらにもうひとつ内容理解への手がかりです。この文書が残された村は、膳所藩領であったことです。そして①「全く我等不徳なる故之事かと存候」(まったく私たちの不徳の致すところ) ②「此度領内百姓并町方之者共安穩のため」(領民の安穩のため)という この2点より 上位者から通達された内容と判断できそうです。

ここで再び冒頭の「御直筆」に注目すると 参考になる文献があります。膳所の郷土史家竹内将人氏がまとめた『膳所六万石史』です。それによれば 膳所藩では代々領内に対して生活規定や撫育教育を含む定書だけでなく それ以外の個別法令も出されます。その中で 第18代藩主本多康禎(藩主の期間 1806 1847)が 文化4年(1814)以降に出した通達は「御直筆写」として村々で写して残されてきたといわれています。康禎は京都の儒学者 皆川淇園に学び 民政において仁愛を重視したことから 通達の内容も儒学に触れた内容も多く しかもそれは各村庄屋を通して読み聞かせられ、内容の徹底がはかられたといわれています。

以上を踏まえ 今回の古文書の「御直筆写」を考えてみると 藩主康禎は流行病が起こった翌年、対策や蔓延防止をよかるため、領民に対してその心得を出したのではないかと考えられます。年代がよっきりとはわかりませんが たとえば西日本でコレラが大流行した文政5年(1822)の翌年の文政6年に出された文書であるかもしれません。

このように 地道な解読作業ですが 膳所藩主が領民に寄り添いながら「流行病」への対処しようとした苦心したことが読み取れるのではないのでしょうか。また今年度どこかで皆さんと講座で古文書を読める日を楽しみに準備したいと思います。

(学芸員 高橋大樹)

收藏品紹介
 令和2年に新しく重要文化財に指定
絹本着色天台三祖師像 金台院蔵

令和2年3月19日、開催された文化審議会文化財分科会の審議、議決を経て、当館に寄託されている金台院蔵「絹本着色天台三祖師像」が新たに国の重要文化財に指定されました。本図は、智顛、最澄、円仁という3人の祖師の姿を雄大な山の中、描き込むという極めて異例な作例であり、また、鎌倉時代に制作された大変質の高い仏画であるという点が評価されました。

画面を見てみると、中央にその3人がちょうど三角形の構図で配置されており、頂点に描かれるのが天台大師智顛(538～597)です。智顛は、中国の南北朝時代末から隋時代の初めにかけて活躍し、法華経を中心とした天台教学を大成した僧であり、実質的な中国天台の祖とされています。その智顛の左下に描かれるのが伝教大師最澄(766～822)です。最澄は今の津山市出身で、天台教学を学ぶため唐に渡り、帰国後、比叡山延暦寺を作り、天台宗を開きました。その最澄と向かい合うように描かれるのが慈覚大師円仁(794～864)です。円仁は今の栃木県出身で、若くして比叡山へ上り、最澄の教えを受けました。最澄の没後、師と同じく唐に渡り、帰国後は比叡山延暦寺に首楞嚴院を作り、一塔の一つである横川の礎を築きました。

以上のように、本図には天台教学を作り上げた智顛、それを日本に持ち帰り、天台宗を開いた最澄、その最澄の教えを受け継ぎ隆盛させた円仁という、現在まで連続と受け継がれてきた比叡山延暦寺の根本とも言える3人を同じ画面の中に描いているのです。

3人が禪定する険しい山のすぐ下には水辺が広がり、空には雲がたなびき、金色に輝く太陽が描かれます。山肌には松などの針葉樹の他に、桜や紅葉のような木々によって四季を表し、山間を縫うよう、小川が流れ、滝となり、水辺へと流れ落ちていきます。山水図として観ても大変優れた出来栄を示す本図は、画面だけでなく縦151cm、横80cmという大きなもので、実際にこの絵を見るとそのダイナミック感に圧倒されます。

では、この山はいったいどの山なのか。いくつか候補が考えられますが、滋賀県にお住まいの方でしたら、やはり比叡山を琵琶湖越し、対岸から見た風景を想像されるのではないのでしょうか。

国も時代も異なりますが、天台宗の基礎を作り上げた3人の教えは今も比叡山の中で生き続けているのです。

(学芸員 鯨井清隆)



重要文化財 絹本着色天台三祖師像
 鎌倉時代(14世紀) 金台院蔵



琵琶湖の対岸から見た比叡山